院内報「みらい」（骨の腫瘍）

骨にも、おできの一種である腫瘍（しゅよう）ができることがあります。他の胃や食道などの内臓と比べると発生はまれです。ほとんどが原因不明で遺伝性はありません。骨の腫瘍は、生命の危険をおよぼさない良性腫瘍と肺や肝臓などに転移して最終的に死につながるような悪性腫瘍に分けられます。

良性腫瘍は、だいたい０歳から３０歳代までにできます。ひじのまわりに骨が異常にでっぱる骨軟骨腫（こつなんこつしゅ）や手の指にできる内軟骨腫（ないなんこつしゅ）が代表的です。これらは、手術をしなくても良いものや簡単な手術で済むものがほとんどです。

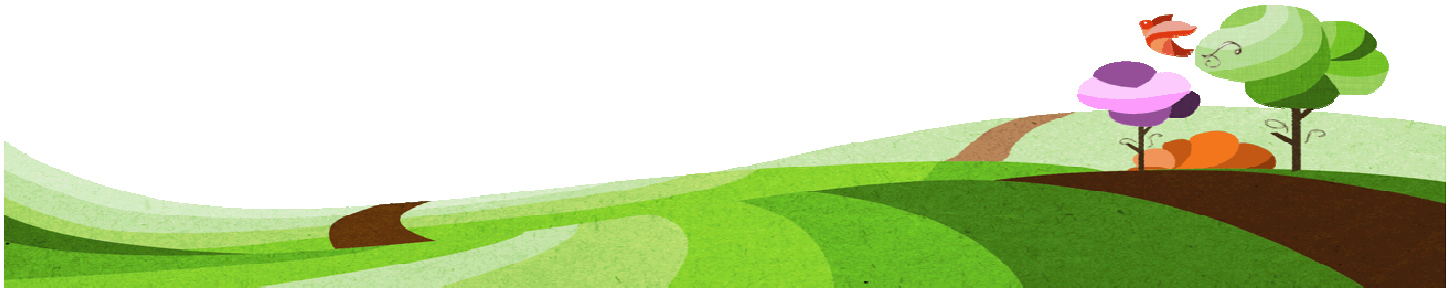
一方、悪性腫瘍は１０歳代によくみられるものと４０歳代以上から高齢者まで広い範囲で発生するものがあります。１０歳代では骨肉腫（こつにくしゅ）、４０歳台以上は他の癌（乳癌、前立腺癌など）が転移して骨で増殖した転移性骨腫瘍（てんいせいこつしゅよう）に代表されます。

骨肉腫（骨にできる癌）は、ひざのまわりの大腿骨（だいたいこつ）や頚骨（けいこつ）にできる非常に悪性な腫瘍で、発育が早く、まごまごしているとあっという間に肺に転移して死に至ることもあります。よくテレビで子供が病気で足を切断されるシーンがありますが、ほとんどがこの病気です。

骨肉腫になると抗癌剤（こうがんざい）の点滴治療、手術やリハビリを含めて約一年間の入院生活が続きます。薬の副作用により髪の毛が抜けたり、吐いたり、手術で人工関節という金属を入れて足を残す事に成功しても生存率６０～７０％という大変な病気です。

骨にできる悪性腫瘍は硬いと想像するかもしれませんが、実際は豆腐のかすのように柔らかくメスやハサミで簡単に切れます。それがどんどん骨を溶かし、破壊して膨らんでいくために、長期間にわたり痛みが取れないどころか日増しに強くなっていき、局所もどんどん腫れて来るといった症状がみられます。１０歳代でこのような状態がみられる場合は、すぐにレントゲン検査を受ける事が必要です。

また、もうひとつの悪性腫瘍である。転移性骨腫瘍は、今後高齢者社会を迎えるにつれて増えていく病気のひとつとされています。日本人の４人に１人は癌で死亡するという今日、移転した癌が骨で発育した場合には、衰弱した体に骨の痛みというムチを容赦なく打ち込んできます。この痛みは大変強く、高名な整形外科の教授がこの状態になり、癌の骨転移がこんなに痛いとは思わなかったと、痛みをとるためにすぐに麻薬を使用したという事実もあるくらいです。部位としては脊髄（背骨や腰の骨）に起こることが多く、だいたいがレントゲン写真で骨折を生じており、重症では脊髄神経が障害され下半身麻痺になります。

このように頻度は少ないですが、骨の悪性腫瘍は一度罹ると険しい治療の道のりと、悲惨な結果が待ち構えている病気であるため、レントゲン写真やＭＲＩなどによる早期診断と早期治療が必要になります。早めに検査を受けましょう。

平良　勝成